

■『西夏文「妙法蓮華經」写真版（鳩摩羅什訳対照）』より ■

発刊の辞

池田大作

創価学会「法華經写本シリーズ」の第8冊として『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」——写真版（鳩摩羅什訳対照）』が、西夏語研究の第一人者で京都大学名誉教授・学士院会員である西田龍雄博士の編集によって完成した。

本書には、1998年11月に東京・新宿区の戸田記念国際会館において、東洋学研究所サンクトペテルブルク支部と私が創立した財団法人東洋哲学研究所が共同開催した「法華經とシルクロード」展で展示された貴重な西夏文法華經の写本・刊本がカラー写真で紹介されている。また、同支部から贈られた白黒マイクロフィルムからの写真も補充されている。

いずれの写本・刊本も、ナチス・ドイツによる900日に及ぶ猛攻の中にあって男女2人の研究員が地下室に退避させ守り抜いた文書の中に含まれるものである。まさに、暴力と狭量な民族主義に対する文化と人間主義の勝利の貴重な“証人”である。

また、ソビエト連邦崩壊後のロシア経済の混乱時にあっても、ユーリー・A・ペトロシャン博士（元所長）、エヴゲーニイ・I・クチャーノフ博士（前所長）、マルガリータ・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ博士（写本室主事）をはじめ東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の方々は、ひたすら文化のために写本を守り抜いてこられた。名声も、富も求めず、言うに言われぬ苦しみを乗り越えてこられたのである。

「文字を見てください、ぜひ、この文字を。」

「法華經とシルクロード」展をともに観賞した際、熱く語られたクチャーノフ博士の言葉が蘇る。

「サンスクリット語などの経文の文字です。この文字を使って、人々が、どのように心を通わせあったのか。そんな想像にひたりながら、じっくりと文字を楽しんでほしいのです。」

その文字の中に西夏語の法華経もあった。

諸民族の祈りがこめられた経文の文字は生きていた。光り、歌い、呼びかけていた。宇宙の根源で「渦」を巻き、「波」打っている大生命のリズムを写しとった表現であった。文字は魂であり、命であった。

この文字を守り伝えるために、幾世紀、どれほど多くの仏教徒が苦心惨憺したことだろう。そう思うと、生きて、生きて、生き抜いて、シルクロードの東の果ての日本を訪れ、多くの人たちに出あえた文字たちが、喜び舞っているように見えた。

私がシルクロードへの憧れを抱き始めたのは、十代になって間もない時であった。

授業でシルクロードの話聞き、だれも住んでいそうもない砂漠に文化の宝物があるとは、なんと不思議なことか、と思い、それ以来、大きな夢とロマンを抱かせる憧れの地となった。

この法華経写本シリーズの出版は、シルクロードを通じての仏教の伝承、法華経の流布をたどる事業ともいえ、梵文諸写本に続いて、河西地域を占めた西夏の言語で記された法華経を出版するのは、まことに感慨深い。

今回、収められた西夏文法華経の諸本は、ロシアのコズロフ大佐が1907-09年の探検で、シルクロードのハラホト(黒水城)遺跡のスブルガン(仏塔)の中から発見されたものである。挿絵の付いたものもあり、西夏国を建てたタングート民族の習俗・習慣が描かれ、衣冠や髪型などに民族的特色があるという。西夏の人々が法華経を崇め親しんでいたことをしのばせる。

末尾には、「願わくは、この功德をもって、一切に廻向し、我等と衆生と、皆共に成仏せん」という願文が付いているものもあるという。法華経が教える「自他ともの幸福を願う心」で祈っていたのである。

一時期、敦煌をも統治した西夏人は、仏教を崇拝し諸民族と融和し異民族の文化を尊重していた。領域内には、ネストリウス派キリスト教(景教)を信じるトルコ人やイスラム教徒もいたようだ。文明間対話の先駆者たちであった。

私と西夏との出あいは青春時代にさかのぼる。1943年(昭和18年)刊の『東洋

学の話』に、著者・石浜純太郎博士（1888－1968）が大阪外国語学校（現・大阪外国語大学）でめぐりあった若きロシア人研究者とともに、西夏語の研究に熱中したことが生き生きと紹介されていた。石浜博士は、本書の編者・西田博士を西夏語研究に導いた師である。

石浜博士と研究を競った若きロシア人研究者とは、ニコライ・ネフスキー氏（1892－1937）である。

ネフスキー氏は、1913年に初めて来日し、いったん帰国後、再来日して、日本の古代文化探究のため、日本の北から南まで駆けめぐって民俗学の調査研究にあたっている。近代日本を代表する学識者の新渡戸稲造博士と柳田国男氏を中心に日本各地の制度、風俗習慣、伝承などを研究する集いである「郷土会」の定例会にも参加している。

1916年（大正5年）1月12日の夜、今の文京区にあった新渡戸博士の自宅で郷土会が開催された際、ネフスキー青年は、小学校校長で地理学とその教授法を探究する民間研究者と出あった。その研究者とは、私ども創価学会の初代会長である牧口常三郎先生である。

その後、ネフスキー氏は創立間もない大阪外国語学校のロシア語教員となるが、そこで石浜博士と出あい、西夏語の研究を促され、研究者としての転機を迎えたのである。

ネフスキー氏は、1929年に西夏語の解明を願って、資料の豊富な故郷に帰国した。しかし、スターリンによる粛清の嵐に巻き込まれ、1937年に亡くなったのである。

収容所で同室だったV・M・ティチャノフ氏の回想によれば、ネフスキー氏は、やりかけの西夏語辞典がどうなるかを心配し続けていた、という。

「やっとタングート（西夏）文字解読の鍵を見つけたところだったのに……。私はこれまでに、タングート文化について少なからぬ論文を書いたが、この仕事を完成する人がほかにいるのだろうか。私はまじめに生きてきた。だが、自分の仕事を仕上げられなかったことが残念でならない。」（ティチャノフ氏書簡。『アイハヌム』2001年、東海大学出版会刊）

ネフスキー氏の悲願はかなった。氏の開拓した道に東洋学研究所サントペテルブルク支部の前所長・クチャーノフ博士をはじめ偉大な夢を実現しゆく知性が、続いたのである。西夏の研究に生涯を捧げているクチャーノフ博士は、

ネフスキー氏の名を学生時代に最初に聞いてから半世紀になる。そして、研鑽に研鑽を重ね『西夏国大法典』を10年以上かけて発刊した。また、西田博士との共同発案で計画され、京都大学言語学研究室の全面的協力により発刊されたのが『西夏語仏典目録』である。引き続き『西夏語・ロシア語・英語・中国語辞典』の編纂と精力的に取り組まれている。

この西夏文法華経の共同出版にあたり、はからずも、西田博士が編者として、またクチャーノフ博士はロシア側の当事者として協力していただいていることに深い縁を覚えずにはいられない。

クチャーノフ博士の法華経について語られていた言葉が、私の胸に響いて離れない。

「万人に平等に慈悲を注ぐことを説く法華経は、平和思想の経典です。法華経の慈悲の心が世界に広がっていくことを私は願っています。」

私も同じ思いである。約半世紀にわたり、法華経の心を広げるために、世界を駆けめぐり、対話を積み重ねてきた。

法華経が説く「人間の尊厳と平等」の思想は、時空をこえて普遍的な価値をもっている。“あらゆる人を幸福に”との経典が発するメッセージが、この写本シリーズの刊行を通してさらに広がりゆくことを願うものである。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)

(本稿は、2005年3月31日に出版された『西夏文「妙法蓮華経」——写真版(鳩摩羅什訳対照)』の「発刊の辞」を転載したものです)